



2013年3月25日 第39号

JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

第56回日本手外科学会 学術集会開催にあたり

田中寿一
(兵庫医科大学整形外科教室)

目次

- 第56回日本手外科学会学術集会開催にあたり
- 2012年度JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記
- ハンドギャラリー(生田コレクション5「傷ついた手、あるいは醜い残酷な手」)
- 第2回手外科医のリスクマネジメント 専門科目外の診療はどのように対処すべきか?
- 第1回日本手外科学会 カダバワーク ショップ報告
- お知らせ
- 編集後記

第56回日本手外科学会学術集会を、平成25年4月18日(木)・19日(金)の2日間、神戸国際会議場にて開催させていただきます。今年(平成25年)は、兵庫医科大学整形外科教室開講40周年にあたり、私にとりましては手外科診療を始めてから30年の節目になり、集大成の年であると考えております。この栄誉ある本学術集会をこの神戸の地で開催させていただくにあたりまして、兵庫医科大学整形外科教室吉矢晋一主任教授をはじめ教室・同門の強い支持をいただき、総力を挙げて、鋭意準備して参りました。この神戸は、第1回本学術集会(天児民和会長)が開催された由緒ある地であると共に、恩師の柏木大治先生が第5回を、中野謙吾先生が第28回を開催された地です。今回が4回目になり、とりわけ名誉なことと思っております。これも偏に日本手外科学会会員の皆様のご支援の賜物と考えています。

さて、プログラムは、過日査読委員の先生方の御協力の下、完成いたしました。メインテーマは、「手外科—確かな技術の伝承」です。シンポジウム・パネルディスカッションテーマに「スポーツ傷害手の治療」と「高齢化社会の手外科診療」をあげました。これら日常診療で多く関わる手の疾患に対して、これまでに築かれた確かな技術を駆使した治療がなされ、それをいかに伝承してゆくかを考えることが、本学会の意義となります。

さて、内容ですが、シンポジウム5題、パネルディスカッションを8題企画いたしました。シンポジウムは、まず、一日目の朝に歴代手外科会長に、“伝承したい私の手外科”をお願いいたし、先生方の思うところをご存分にお話しいただけたらと思っています。次に、『スポーツ傷害手

の治療』のテーマから、“手のスポーツ傷害”と“舟状骨骨折・偽関節の治療”、『高齢化社会の手外科診療』のテーマから、“母指CM関節症の治療”と“我が国の橈骨遠位端骨折の治療の現況”を、企画いたしました。パネルディスカッションでは、“高齢社会における手外科診療” “腱鞘炎に対する超音波診断と治療”、“橈骨遠位端骨折に対する内固定のコツとピットフォール”、“難渋する舟状骨骨折・偽関節の治療”を取り上げました。その他、高齢者に増加傾向のある“月状骨軟化症(キーンベック病)”，そして、今年も“女性手外科医のcareer build up”をお願いいたしました。また、新しい試みとして“手術する手外科開業医の楽しみと苦しみ”を開業手外科医よりお話いただくことになっています。また、手術を直に見ることのできる“ビデオで伝えたい私の手術手技”も興味の惹くセッションとなっています。海外からは、私がTravelling-fellow shipや国際学会でのお付き合いで知り合った先生方に御講演をお願いいたしました。米国からRichard A.Berger先生“Sports Injuries of the Hand”とRobert M. Szabo先生“Hand clinic for the aged people”、韓国のDuke Whan Chung先生“Osteochondral reconstruction in the Radio-Carpal joint” 香港のPak-Cheong Ho先生“Advance in Arthroscopic surgery of the Wrist-from Misty to Mighty” シンガポールのBeng Hai Lim先生“the Reconstruction of the volar and dorsal ligament of the Scapho-Lunate joint”ドイツのDietmar Pennig 先生“Correction of malunion of the distal radius and ulna”そしてスイスからは、Daniel Herren先生“Fusion versus arthroplasty in the treatment of destructed finger joints”とJoerg Gerhard Gruenert先生に“Callenges and complications in distal radius fractures”、と御講演を頂きます。それぞれテーマに沿った内容で、また、演者の先生方は、我が手外科学会に馴染みの深い先生方ですので、わかりやすくお話していただけると楽しみにたしております。次に、教育講演は3題です。手外科基盤学会の一つである形成外科から光嶋 勲先生に“手外科医を目指す形成外科医へ”をお願いし、形成外科会員からの本学会の会員増加に寄与していただけるものと期待しております。そして、伊藤恵康先生に、“我が国における手部スポーツ傷害治療の現況と課題”、堀内行雄先生に“我が国における高齢者手部疾患の治療の現況と課題”をお願いしております。その他、ランチョンセミナー11題、ハンズオンセミナー8題が、企画できました。これらは日整会と日手会の教育研修単位を取得できるように申請中です。さて、一般演題については、応募演題数585題を97名の査読者に依頼し61題不採用、最終採用率は89.6%となりました。今回は、ポスター発表をなくし、その代わり“Short talk”発表に代えました。短い時間の御発表ですが、質疑応答もあり、要点を絞って、有意義な御発表を期待いたします。

また本学術集会の翌日(4/20)には日本手外科学会教育研修委員会主催の春季教育研修会が開かれます。その他に、関連研究会としての神経因性疼痛研究会のランチョンセミナーでは兵庫医科大学の野口光一教授にご講演をお願いしております。例年の如く学会終了後に第36回末梢神経を語る会も開催されます。また、4月20日ー21日には第一東和会病院 藤原英子会長主宰で、第25回日本ハンドセラピスト学会学術集会が開催されます。同じ会場であり、期間がちょうどずれているため、2つの学会の交流がよりし易くなると思います。

さて、本学術集会から抄録集は紙媒体の冊子をなくし、ホームページからの閲覧するシステムになります。すでに、日手会雑誌がオンライン化されており、従来の学術集会抄録集のみを冊子媒体

で発行するという不整合を解消するためです。このため、全ての演題が網羅されたAbstract (各演題200字程度)の小冊子を用意し、さらに会場ではオンライン化された抄録内容を印刷できるように準備する次第ですが、御自身でもホームページからの御準備をよろしくお願い申し上げます。最後に、神戸は、地震から18年経過し復興も成し遂げ、安全な地域となっています。全国から集まりやすい交通の便、充実した会議場・宿泊施設が整っております。特に東京・札幌・沖縄やなど、神戸空港を利用できる先生方は、僅か10分で会場到着となります。新幹線の新神戸からも20～30分で会場まで来ることができます。学会の合間には、昨年、NHKで放映された平清盛の福原京―平家物語歴史跡を探索され、中華街で食事でもいいかと思います。また、近くには、美しい新緑の六甲山、その裏には太閤秀吉の愛した有馬温泉、世界一の明石大橋を渡り淡路島・うず潮見学、京都・奈良へも近く、多くの観光ができます。是非ご家族づれでのお越しをお待ち申し上げます。本学術集會に多くの参加者が来ていただけるものと確信いたし、準備万端お待ち申し上げます。

2012年度JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記

JR東京総合病院 整形外科 三浦俊樹

シカゴでの学術集会参加後、名古屋大 建部将広先生と米国手外科施設を訪問して参りました。私は前半訪れたミシガン大学、ワシントン大学の報告をさせていただきます。

シカゴから4時間半、電車移動でデトロイト近郊にあるアナーバーに到着しました。のどかな光景が広がるアナーバーは全米屈指の州立大学の一つミシガン大学の学園都市です。大学病院はスタッフ医師が3000人もいる巨大なメディカルセンターでもあります。手外科を率いるKevin Chung先生はアウトカム評価法MHQ開発などアクティビティーの高さは有名ですが、どのように働いたらあれだけの仕事こなせるのか興味がありました。参加した研究ミーティングでは中国からのフェローや医学以外の背景をもつ10人を超える研究者が各々プロジェクトをすすめChung先生がチームリーダーとして統率していました。グループで年25報の論文を書いていることには驚かされました。一方Chung先生は手術も多く手掛け、滞在中に母指化術ほか小児先天奇形から手指骨折まで幅広い症例を見学できました。その際、術中写真や動画で細目に記録しているのが印象的でした。1週間密着を通じ、「メールは5分で返信がくる」と言われるChung先生の仕事の早さと効率的な時間活用法、リーダーシップには見習うところ大でした。素顔のChung先生は演歌が好きで愛車はHonda Fitという気さくなお人柄で、来年以降も希望があればフェローを受け入れるから日本に帰ったら伝えておいてくれとのことでした。

2つ目の訪問先はセントルイスのワシントン大学です。バドワイザーの本拠地でもある中西部のこの街は現在全米でも治安の悪い所とされますが大学周辺には驚くような豪邸も立ち並び安全です。大御所Gelberman先生が主催する整形外科は手外科はじめ脊椎や肩など多くの分野で世界の第一線を走ります。手外科はGelberman先生の他、皮弁手術も多く手掛けるBoyer先生、小児疾患の大家Goldfarb先生、新進のCalfee先生などス



真中がKevin Chung先生、向かって左が建部先生、右が三浦

スタッフが充実しています。診療はメディカルセンター内のバーンズ・ジュイッシュ病院の他、寄付で運営されているシュライナー病院、整形外科が街の郊外に設立した専門施設を股にかけて忙しく診療が行われます。全体の手術件数(数千件)はあまりに多すぎて伺っても正確には答えが返ってこないことには驚きました。Gelberman先生は穏やかな紳士で、手術は緻密で正確です。見学したradial styloidectomyの手術では「骨切除は掌側4mm、背側7mm」といった具合にレジデントに指導されていました。Gelberman先生はじめ多くの先生に大変歓迎していただき1週間があっという間に過ぎていきました。

最後にこのような貴重な機会を与えていただいた理事長の佐々木孝先生・落合直之先生、担当理事の金谷文則先生・柴田実先生、池上博泰先生はじめ国際委員会の皆様、前学会長別府諸兄先生ほか、ご一緒させていただいた建部将広先生、留守を守ってくれたJR東京総合病院のメンバーなどお世話になった多くの方々にこの場を借りて御礼申し上げます。



真中がGelberman先生、向かって先生の右が建部先生、左が三浦

JSSH-ASSH traveling fellow 2012報告記

— Go West —

名古屋大学 手の外科 建部将広

2012年9月から10月にかけて約一ヶ月の日程でJSSH-ASSH traveling fellowとしてアメリカを訪問してきましたのでここに紹介させていただきます。JR東京総合病院の三浦俊樹先生と2名での訪問となりましたが、三浦先生が転勤まもなくで長期休暇が取れず、最後の10日間は一人で訪問させていただきました。前半部分は三浦先生に紹介していただき、当方は後半部分についての報告をさせていただきます。

● Stanford University

セントルイスからスタンフォード大学のあるPalo Alto (スペイン語で古い木/大学のシンボル)まではソルトレイクシティ経由でサンフランシスコまで空路、そこからはレンタカーで動きました。東のハーバート大学・西のスタンフォード大学と並び称される名門大学です。土地柄シリコンバレーとの関連も強く、大学内はほぼすべての建物は寄付によるもので羨ましい限りでした。用意して頂いた宿泊先が研究施設の中にあり、IDがないと入れないセキュリティーゲートがあるのには驚きましたが、その分安心して生活できました。こちらの手の外科は整形外科医と形成外科医からなるチームでした。外来部門が離れた場所に有り、そちらで Dr. Ladd, Dr. Chang, Dr. Yaoの手術を見学させて頂きました。三浦先生は残念ながら途中で帰国してしまいましたが、同じくASSHのフェローで来ていた韓国のDr. Eunと一緒にプレゼンを行いました。

● Dr. Diao in San Francisco

Palo Altoからサンフランシスコまでは再度レンタカーを借りての移動を選択しました。ホストのDr. DiaoはサンフランシスコのダウンタウンでPrivate clinicと他のDr.と共同で手術室も運



Stanford大学 Dr. Laddと三浦先生、筆者

営しております。両者を見学しつつ、University of California, San Francisco (UCSF) と San Francisco General Hospitalの見学をさせていただきました。Private clinicでは基本的にMini C armとエコーでの診断を行っていました。UCSFのHand Conferenceでプレゼンを行い、手術部門も見学させていただきました。最後は単独での行動となり、若干の不安もありましたが、耳も慣れてきたせいかなんとか研修をこなすことができました。Diao先生には自宅へ呼んで頂くなど大変良くしていただき、また最終日には自家用車で空港まで送っていただきました。

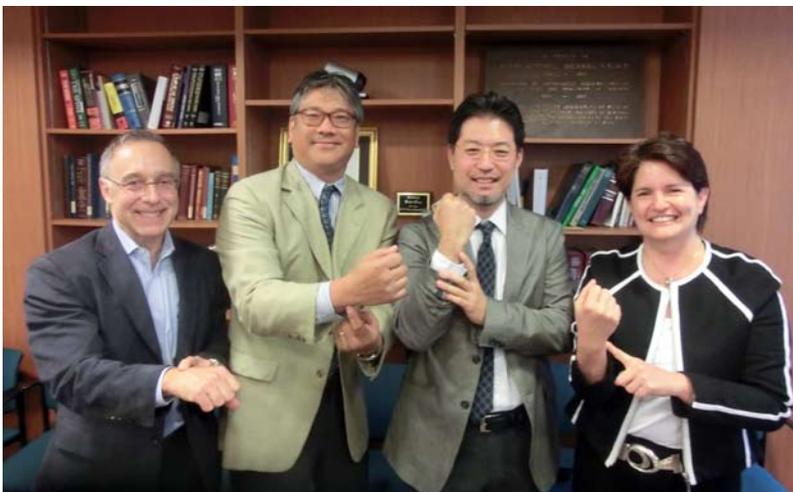


Stanford大学でのプレゼン後

● 訪問を終えて

保険制度をはじめとする診療、そして学生／レジデント／フェロー／スタッフといったシステム、外来部門と手術室が別にあるそれぞれを効率よく利用するシステム等、日本にはない多くの物を学ぶことが出来ました。Private clinicを見学できたことも大きかったと思います。今回は学会のフェローという立場で訪問先から本当に歓迎され、様々な先生と交流することができました。一生の宝になると思います。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えていただきました理事長の佐々木孝先生、担当理事の金谷文則先生・柴田実先生、委員長の池上博泰先生、国際委員会の皆様をはじめとして、ご一緒させていただいた三浦俊樹先生に心より感謝申し上げます。これからの日本手外科学会・日米手外科の交流にお役に立てればと考えております。並びに、快く送り出していただき不在の間をフォローしていただいた名古屋大学手の外科教室員の先生にこの場を借りて心より御礼申し上げます。



UCSFにて

手は語る ハンドギャラリー（生田コレクション5） 傷ついた手、あるいは醜い残虐な手

広島手の外科・微小外科研究所 生田 義和

このクレヨン画は、今から40年程前に描いた絵で、1972年6月19日に私が手術した51歳の女性の患者さんの手で、「電気鋸による示指と中指の完全切断の手」(1973年作)である。広島大学で初めて再接着に成功した外傷手の術前の状況を、後にスライドを見ながら私自身が描いたものである。

当時のある日、通常の病院勤務が終わった夜中、ひとり部屋にこもり、

白い画用紙を三脚の画架に掛け、その画面を撮影出来るようにボウレックスの16ミリ映画撮影機を三脚で構え、さらに照明用の電球を2つ取り付けて白い画面から撮影を開始し、少し描いては数秒間撮影し、といったように描かれてゆく絵を経時的にコマ撮りしながら描き上げて、いわゆるアニメーション映画を作製し、ほぼ完成した頃に朝を迎えた。

当時私は34歳。このアニメは、この患者さんの術前、術中、術後の16ミリ映画の冒頭に挿入し、「切断指再接着」の映画として、1973年パリ、シンガポール、1974年マニラ、1975年イーストグレンステッド（イングランド）、ホノルル、1976年モンペリエ、マニラ、1977年パリ、テヘラン、1980年ブレスシア（イタリア）、1982年シドニー、1983年ソウルなどで供覧した。

この絵は完全に医学用の映画の一部として作成したものであり、純粋な観賞用の絵ではない。一般に、「損傷された手」は美しくないもので、絵画の題材としては不向きである。また、私達の様な手外科医は、当然美しい手を目標にした治療で日夜努力している中で、手術術式や症例報告では「損傷手」を多数の医師を対象に供覧するが、一般大衆を対象としてこれを目に触れるようには扱わない。

一方、大衆を対象として描かれた損傷手で唯一と言っても良い、また最も多いと思われる絵画や彫刻は「イエス・キリストの磔刑」であろう。





今回の記述の中で、次に述べる1節は宗教と深く関わることであり、信者の方にとっては触れてほしくない内容であるかも知れないが、筆者の意図は決して聖書に記述されていることの内容に踏み込んでの論証や、イエス・キリスト、あるいはキリスト教、およびキリスト教信者の方々を冒瀆する意図は全く

無く、「絵画に見られる傷ついた手を題材にして私見を述べること」のみが目的であることを理解していただけることを切に願いながら続けることとする。

前頁の絵はジョバンニ・ベリーニ (1433-1515年、イタリア・初期ルネッサンス・ヴェネチア派) 作「ピエタ (聖母と聖ヨハネに支えられる死せるキリスト Cristo morto sorretto della Madonna e da san Giovanni : 1460年頃: ミラノ・ブレラ美術館蔵)」の一部である。この絵では、手の傷は第2中手骨と第3中手骨の間にあるが、両手を固定するための釘が、手のどの部位に打たれたかについては様々な考察がある。ある人は聖骸布 (The Shroud of Turin) に残っているイエス・キリスト磔刑後の血液痕から推察して、釘が打たれた部位は中手骨の部位ではなく、手根骨の中央列であろうと推論し、またオザワ・カオル氏の「イエスはいかにして十字架の上で死んだか」では手関節の中枢、すなわち橈骨と尺骨の間ではないかとの推論等がある。

私がクリスチャンである妻のためにミュンヘンの市庁舎前で購入して持ち帰った木彫のイエス・キリスト像では、写真の如く手関節の中枢に打たれた釘が見える。



なお、聖骸布に関しては、1988年4月21日に、布の一部を切り取り、炭素14による年代測定のテストをアメリカのアリゾナ大学、イギリスのオックスフォード大学、スイスのチューリッヒの研究所の3ヶ所で行った結果、この布は1260年から1390年のものであるとの報告があった。したがって、この聖骸布から推定されたキリストの手に対する釘の刺入部位の考察は意味のないものとの判断もあるが、聖骸布の真否に関する論争は未だ終止符が打たれる状況ではないらしい。

今回の主題である「傷ついた手、あるいは醜く残虐な手」の締めくくりにあたり、NHK番組の「女性手帳」や「関東甲信越・小さな旅」あるいは「土曜・美の朝」などで有名なアナウンサーの山根基世さん (昭和23年生まれ) の「なんでもする手」を原文のまま紹介する。

「なんでもする手」

25年前、まだ栃木に女子刑務所があった頃、そこに入っている女囚にインタビューしたことがある。取材に応じてくれた5人の内の一人は、3歳の我が娘を殺めたという27歳の女性だった。だが、その人は何も話さなかった。どんな質問にも「ハイ」「イエ」としか答えない。これでは番組にならないと焦った私は、コトの経緯を一つひとつ具体的に聞いていくしかない、覚悟を決めた。

「事件は何年前ですか」 「・・・3年前です」

「季節はいつ頃？」 「・・・ピンクのセーターを着てました・・・春でした」

「時刻は？」 「・・・夕方です」

「その時、お子さんは何をしたらしたんですか」 「・・・電話遊びをしました」

「で、どうやって？」 「・・・・・・・・首を」

「首をどう・・・？」と聞くと、彼女は一瞬口ごもったあと、

「手で・・・・・・・・」

と答えた。その瞬間、細く温かい幼児の首の柔らかい感触が、私の手にも生々しく生じた。

優しく愛撫したこともあるはずのその手で、我が娘の首を・・・・・・・・。

手はなんでもする。

(「手」をめぐる四百字]、文化出版局、2007年発刊より)

参考のホームページ

1. 「イエスはいかにして・・・」オザワカオル著
<http://www002.upp.so-net.ne.jp/harapeko/jesus/p1.html>
2. 「聖骸布の上の人物の姿」
<http://www2.ocn.ne.jp/~g-compri/page2.html>
3. 画家ジョバンニ・ベッチーニについて
http://www.salvastyle.com/menu_renaissance/bellini_g.html

専門科目外の診療は どのように対処すべきか？

宇治武田病院 勝見 泰和

新連載のシリーズ「手外科医のリスクマネジメント」では、医療についての裁判事例から、手外科医として知っておいたほうがいい法律上の解釈について述べてみます。今回は、地方裁判所の判決事例を紹介し、専門科目外診療について考えてみます。この事例で学ぶことは、専門科目外診療で要求される医療水準の問題点を知ること、そして手外科診療での他科疾患鑑別の認識をすることです。

1. 事例の概要

平成21年3月3日午後9時頃、X（昭和13年生まれ）は店で代金を支払う時に左手から硬貨を落とし、拾い直してもまた落とすことから、脳梗塞が疑われ、救急車でかかりつけのA病院に搬送された。当直のB医師（消化器外科専門）は意識正常、歩行可能でしびれや麻痺がないこと、また翌日被告病院を受診予定であることから、翌日検査を受けるように、また異常時は再診するように伝え、原告を帰宅させた。翌日診察したC医師は、前日当直医が診察したこと、一過性脳虚血発作（以下、TIA）が疑われたことが書かれていたことから、急性脳梗塞の有無を診断すべく、脳の単純MRI、脳動脈のMRAなどの諸検査を依頼した。これらの検査では右側に陳旧性小梗塞巣などを認めたが、新鮮な脳血管障害を示唆する拡散強調画像の異常信号は認められなかった。以上より、陳旧性脳梗塞、多発性脳虚血と診断し、それまでの投薬を処方し、4月8日の予約をした上、特別な指示もなく帰宅させた。3月18日午前4時40分頃自宅のトイレの前で倒れ、救急車でD医療センターに搬入された。意識障害、重度の感覚性失語、右上下肢麻痺があったことから、脳梗塞と診断され緊急入院となった。MRI検査の結果、左中大脳動脈領域に拡散強調画像上高信号域が認められた。抗血栓剤などの治療にもかかわらず、重篤な後遺障害が残った。

そこでXはA病院の医師らには、早期機序確定・治療開始義務違反、転送義務違反、説明・指導義務違反があったとして、8053万円の損害賠償を請求した。これに対し、A病院は脳卒中の専門病院ではなく、また担当医師は脳卒中の専門医でないが、診療行為及び診断は当時の医療水準に十分に適合するもので、転送義務違反、説明義務違反もないと主張した。

2. 裁判所の判断

脳卒中の非専門医であっても、当時の医学的知見、診断基準からすれば、担当医師としては、発症時の症状等からTIAと診断、または強く疑って、その後の診断に臨む必要があった。意識障害が生じていないことからTIAについて否定的な判断をした事は不適切であり、TIAについての知識不足が誤診の原因であると判断し、慰謝料400万円と弁護士費用40万円の支払いを命じた。

3. 解説

正当な事由がなければ、診療治療の請求を拒んではならないとされており、専門科目外の診療を行わなければならないこともある。この事例では何が問題であったのであろうか？麻痺様の症状はあったようだが、診察時にはその症状はなく、意識障害もなかった。翌日の精密な検査でも陳旧性脳梗塞の所見で、新鮮なものは見つかっていない。2週間後に急性脳梗塞を生じているが、そこまで予見すべきであろうか。疑問は残るが、裁判所は意識障害がなくてもTIAを疑い、原因を検索し、治療を開始すべきとしている。TIAは24時間以内に消失する局所脳虚血状態であり、持続時間は短時間で長くても一時間以内のものが多い。重篤な脳梗塞の前駆症状であることが多く、臨床的にTIAは大切な疾患であり、発症直後では一週間以内の原因検索の検査が必要とされている。翌日MRI検査が実施されているが、心原性脳梗塞の検査をしていないために部分的敗訴となっている。そこまで要求されるのであれば、専門科目外は怖くて診れないという若手医師の悲鳴は納得できる。専門科目外診療を行う場合の注意義務の具体的基準として、担当医や医療機関をとりまく社会的・経済的・地理的諸環境等を考慮して決定するのが相当とされている(瀬上玲子「専門科目外の医療をする医師の義務」新・裁判実務体系(1) 167以下参照)。医療従事者は誰しも最善の医療を提供したいと考えている。しかしながら、現状の救急医療体制での専門科目外診療で、今回の判決のような医療水準が求められることは、非常に問題があると考えられる。

一般の手外科診療では、手の脱力やしびれの症状を愁訴とする患者さんが多く来院する。この中には、このような他科疾患も当然混じってくる可能性がある。救急搬送された事例であるが、手外科診療でのピット・ホールにならないように注意を喚起したい。

これからもシリーズとして手外科医のリスクマネジメントについて述べてみます。できるだけ身近な問題をとりあげますので、このことが知りたいということがあれば、事務局にご連絡をお願いします。

(判例時報2157号、福岡地裁平成24年3月27日判決)

第1回

日本手外科学会カダバーワークショップ

第1回日本手外科学会カダバーワークショップは2012年12月1日(土)・2日(日)の両日、札幌医科大学基礎棟北1講義室および解剖実習室で、札幌医科大学整形外科ならびに解剖学第二講座の協力のもと開催されました。

受講者は事前に学会ホームページを通して応募し選考された37名の会員で、講師は学会の教育研修委員会担当理事、アドバイザーならびに委員(矢島弘嗣、田中克己、日高典昭、青木光広、小島康宣、建部将広、大井宏之、服部泰典、信田進吾、鳥谷部荘八)でした。事務局からは齊藤葉子、鷺見由佳の2名が参加しました。



第1日目は開会に先立ち、解剖学第二講座藤宮峯子教授の「臨床医学の教育及び研究における死体解剖のガイドライン」の解説があり、整形外科教室山下敏彦教授(代理：生体工学・運動器治療開発講座名越智特任教授)の挨拶で開会しました。その後は青木光広委員による手術ワークショップのオリエンテーションと手の機能解剖、建部将広委員による手の関節鏡手術、矢島弘嗣委員による手・前腕における皮弁について、それぞれ講義が行われました。施設見学、血管充填剤マイクロフィルの注入、手関節鏡機器の調整などの準備を行い、終了しました。

第2日目は講義室で実習内容の確認した後、解剖実習室に移動し、参加者・講師全員で黙祷後、ワークショップを開始しました。37名の参加者が手関節・CM関節鏡手術グループ9名（講師：青木光広、建部将広、大井宏之、日高典昭）、手・前腕・下肢皮弁手術グループ24名（講師：矢島弘嗣、田中克己、小島康宣、服部泰典、鳥谷部荘八）、肉眼解剖グループ4名（講師：信田進吾）に分かれて研修を実施しました。昼食の休憩をはさみ、手関節・CM関節鏡手術グループでは、上肢牽引装置を導入して、手関節および母指CM関節における関節鏡の操作ならびに手術手技を実習し、手・前腕・下肢皮弁手術グループではマイクロフィルを充填された上・下肢の皮弁拳上を行い、肉眼解剖グループでは解剖アトラスをもとに上・下肢の機能解剖を習得しました。Thiel法という特殊な保存方法で処理されたカダバーは柔らかく、実際の手術にかなり近い感覚で手技を行うことができました。また、講師の熱意ある指導の下、受講生たちの満足度もきわめて高い印象を受けました。実習は事故ならびにトラブルもなく夕刻には全ての予定を終え、全員で黙祷を行い終了しました。また、受講者の欠席・遅刻・早退も認めませんでした。カダバーワークショップ修了証を参加者に後日、郵送しました。



また、ワークショップに参加した会員からのアンケート調査を実施しましたので、その結果を表にしてお知らせいたします。アンケート結果と委員からの意見をもとに、今後のワークショップの進め方について検討を行う予定です。（文責：田中克己、青木光広）

日本手外科学会 第1回カダバーワークショップ アンケート結果 抜粋

（回答数：33人/37人中）

質問1：第1回 日本手外科カダバーワークショップに参加して
大変有益であった25名、有益であった8名、その他0名

質問2：第1回 日本手外科カダバーワークショップに参加して
ぜひまた参加したい23名、また参加したい10名、その他0名

質問3：日本手外科カダバーワークショップに参加して、講師の指導は
大変良かった25名、良かった6名、普通1名、あまり良くなかった1名

関連学会・研究会のお知らせ

平澤泰介先生が「国際外科学会名誉会員」として顕彰されました。

阿部宗昭先生、中村蓼吾先生が「Pioneers of Hand Surgery」に選ばれました。

祝辞は第40号に掲載いたします。

◆第56回日本手外科学会学術集会◆

会 期：平成25年4月18日(木)～19日(金)

会 場：神戸国際会議場

会 長：田中 寿一(兵庫医科大学 整形外科)

詳 細：<http://www2.convention.co.jp/56jssh2013/index.html>

◆第19回春期教育研修会◆

会 期：平成25年4月20日(土)

会 場：神戸国際会議場 3階(301)

主 管：日本手外科学会教育研修委員会

詳 細：<http://www.jssh.or.jp/jp/meetings/instructionalcourse.html>

◆第19回秋期教育研修会◆

会 期：平成25年8月31日(土)～9月1日(日)

会 場：東京都

主 管：日本手外科学会教育研修委員会

詳細は決定次第、学会ホームページに掲載します。

◆第4回特例措置専門医試験について◆

会 期：平成25年4月18日(木) 17:00～18:00

場 所：神戸国際会議場 4階(403)

形 式：指導者講習会(*) 30分、試験説明10分、筆記試験20分 計60分

詳細は<http://www.jssh.or.jp/jp/information/gokaku.html>

(*) 指導者講習会：4月18日の第4回特例措置専門医試験は、試験の説明ならびに指導者講習会を含んでおります。

◆第56回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：平成25年4月3日(水)～5日(金)

会 場：京王プラザホテル

会 長：平林 慎一(帝京大学医学部 形成・口腔顎顔面外科学教室)

詳 細：<http://jsprs56.umin.jp/>

◆第12回国際肩肘関節外科学会◆

会 期：2013年4月10日(水)～4月12日(金)
会 場：名古屋国際会議場
会 長：井樋 栄二(東北大学整形外科学教室)
高岸 憲二(群馬大学医学部整形外科学教室)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/icses2013/>

◆第86回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：2013年5月23日(木)～26日(日)
会 場：広島グリーンアリーナ、リーガロイヤルホテル広島、NTTクレドホール、メルパルク広島
会 長：越智 光夫(広島大学大学院整形外科学 教授)
詳 細：<http://www.joa2013.jp/>

◆第24回 日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：2013年8月23日(金)～24日(土)
会 場：新潟コンベンションセンター 朱鷺メッセ
会 長：柴田 実(新潟大学 形成外科 教授)
詳 細：<http://shinsen.biz/24jpns/>

◆「外保連ニュース第19号」発行のお知らせ◆

外保連ニュースが発行されました。
詳細は下記URLをご参照下さい。
詳 細：<http://www.gaihoren.jp/gaihoren/index.html>

編 集 後 記

各地より例年より早く春一番の便りが届く一方、日本海側は吹雪に襲われる地域もあり、厳しい寒さが続いております。会員の皆様が本号をご覧になる頃には、春の訪れが感じられるのではと期待しております。

私は、今年度より広報・渉外委員を仰せつかり、微力ながら勝見理事、島田委員長をはじめ委員の皆様のお手伝いをさせていただきましたが、初めて編集後記を担当させていただきました本号が、日頃お世話になっております田中寿一会長による本学主催の学術集会のご紹介から始まりますことをたいへん嬉しく思います。

また、毎号恒例のJSSH-ASSH Travelig Fellow報告記ならびに生田先生のハンドギャラリー、前号から始まりました勝見先生のリスクマネージメント、青木先生の第1回日本手外科学会カダバワークショップのご報告など、たいへん興味深くまた会員の皆様の診療や研修の大きな助けとなる記事が揃いました。

今後も、会員の皆様のお役にたてますように、日手会ニュースの内容充実に努めさせていただきますので、何卒よろしくお願いたします。

(文責：垣淵正男)

広報渉外委員会

(担当理事：勝見泰和，アドバイザー：堀内行雄，委員長：島田幸造，
委員：麻田義之，垣淵正男，草野 望，千馬誠悦，西浦康正)